司馬遼太郎　竜馬がゆく　壱

司馬遼太郎

竜馬がゆく

全八巻之壱

文藝春秋

竜馬がゆく 壱（愛蔵版）
昭和五十六年十一月二十五日　第一刷
定価　二千三百円
著者　司馬遼太郎
発行者　杉村友一
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　東京　二六五―一二一一
印刷　大日本印刷
製本　大口製本
製函　トーシキ
万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

目次

門出の花　7
お田鶴さま　34
江戸へ　51
千葉道場　80
黒船来　106
朱行燈　133

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二十歳 163
淫蕩 212
寅の大変 279
悪弥太郎 339
江戸の夕映え 354
安政諸流試合 378

装幀　粟屋充
題字　中田功

竜馬がゆく　壱

門出の花

「小嬢さまよ」
と、源爺ちゃんが、この日のあさ、坂本家の三女の乙女の部屋の前にはいつくばり、芝居もどきの神妙さで申しあげたものであった。
「なんです」
と、乙女がうつむいて答えた。手もとが針仕事でいそがしい。あすという日は、この屋敷の末っ子の竜馬が、江戸へ剣術修業に旅立つ。
「えらいことじゃ。お屋敷の中庭のすみの若桜が、花をつけちょりまする」
「そんなの、わかっちょる……」
乙女は、障子のかげで笑った。
「またいつもの源おんちゃんの法螺じゃ。三月もなかばというのに、また桜が咲くということが、どうしてありましょうぞ」

「まこと、まこと」
どういう陽気のかげんか、源おんちゃんは、障子のむこうでおどっているらしい。
「うそとお思いなら、出て見つかわされよ。たった一輪じゃが、目のさめるごとくにパッと咲いちょりまする」
「ほんと？」
つられて、縁側へ出てみた。ひどく陽がまぶしかった。なるほど、下枝のあたりに、クッキリとした白さで、一輪、花が咲いていた。この桜の若木は、弟の竜馬が九つのとき、いたずら半分に植えたものであった。ことしでちょうど十年になる。
「これはほんとじゃ」
乙女は感心してみつめていたが、やがてなにに気づいたのか、声をあげて笑いだした。
笑うと、とまらないたちなのである。いつか、播磨屋橋を馬上で渡りかかったりっぱな武士が、橋のなかごろで馬が放屁をすると、すぐそのあと武士もたかだかと放屁した、というはなしを源おんちゃんがもどってきて話すと、乙女は「うっ」といったきり、目が白くなった。やがて体を倒し、乳をおさえ、白足袋の両足をたたみの上に浮かし、ころげまわって笑いはじめた。謹厳な長兄の権平が本気で心配して、
「これは、医者どのでも呼ばずんばなるまいかの」
と、いったほどのものだ。
乙女は、色白でちまちまと可愛い顔だちをしていたが、からだが、なみはずれて大きく、五尺

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八寸は優にあった。ころげると、ずしりと畳がしなう。よくふとってもいたから、兄の権平や姉の千鶴がからかって、

「お仁王様に似ィちゅ」

といった。これがひろがって高知の城下では、

「坂本のお仁王様」といえば、百姓町人まで知らぬ者はない。そのうえ大きいわりには動作が機敏で、竹刀をつかわせれば、切紙ほどの腕はあった。末弟の竜馬に幼少のころ剣術の手ほどきをしたのは、この三つ年上の乙女である。

「源おんちゃん、つまらぬことをする。これは、紙ではありませぬか」

と、乙女は気づいた。わけをきくと、不器用の源おんちゃんはその紙の一輪をつくるために、ゆうべはひと晩かかったという。乙女はおかしくなったが、途中であわてて笑いをとめた。涙が出そうになったのであろう。

竜馬が、いよいよあす発つときいて、城下本町筋一丁目の坂本屋敷には、朝からひっきりなしに、祝い客がつづいている。

祝い客たちは、父の八平、嫡兄の権平にそれぞれお祝いを申しのべたあと、かならず末娘の乙女の部屋にもやってくる。言うことばも、きまっている。

「小嬢さまは坊さんがお発ちになったあとは、さぞさびしゅうございましょう」

「なに、左様なことはありませぬ。洟たれが手もとにおりませぬと、さばさばいたしまする」

むろん、この娘らしい空いばりなのである。乙女は、竜馬の十二歳のとき母の幸子が死んでから、わずか三つ上ながらも、弟をおぶったり、添い寝をしたりしてきょうまで育ててきた。竜馬に対しては、若い母のような気持でいたし、あるいはそれ以上だったかもしれない。それほど幼いころの竜馬は、手のかかった子なのである。

坂本家に三十年も出入りしている道具屋の阿弥陀仏などは、うまれつきこの土地でいう異骨相な老人で、ことばに遠慮がないから、

「よくぞまあ、あれほどまでにお育てなされました。申してはばかりあることながら、ここの坊さんはえらい寝小便たれでござりましたからのう」

事実なのである。

竜馬は、十二になっても寝小便をするくせがなおらず、近所のこどもたちから「坂本の寝小便ったれ」とからかわれた。からかわれても竜馬は気が弱くて言いかえしもできず、すぐ泣いた。ときどき近所のこどもたちにまじって、すぐ近所の築屋敷(町名)の河原などであそぶことはあったが、たいていは泣かされて帰ってくる。それも屋敷までのあいだ二丁も三丁もべそべそと長泣きをしながらもどってくるために、城下ではたれでも、

「坂本の泣き虫」といえば「ああ、本町筋の洟垂れのことか」といった。竜馬は、どうしたことか、十二、三になっても、はなじるが垂れっぱなしだった。十二のとき、ひとなみに父は学塾に入れた。城下では、藩の上士の子が上町の島崎七内塾にかよい、軽格の子弟は、おもに車瀬の池次作、大膳町の楠山庄助塾にかよったが、竜馬が入塾したのは、この楠山塾である。

ところが、入塾するとほとんど毎日泣いて帰るし、文字を教えられても、竜馬のあたまでは容易におぼえられない様子なのである。ついに、ある雨の夜、師匠の楠山庄助がたずねてきて、

「あの子は、拙者には教えかねます。お手もとでお教えなされたほうが、よろしかろう」

見はなされたのである。もともと寺子屋の師匠といえばなかば世すぎで教えているのだが、その師匠からも見はなされたとなると、もはや家門の恥辱といってよかった。このときだけは父の八平も長嘆して、

「えらい子ができたものじゃ。この子は、ついに坂本家の廃れ者になるか」

兄の権平もにがい顔をしていたが、乙女だけはくすくすと笑い、

「いいえ、竜馬は左様な廃れ者にはなりませぬ。ひょっとすると、土佐はおろか、日本に名をのこす者になるかもしれませぬ」

「寝小便をしてもかよ」

「はい」

乙女には、竜馬にかけているひとつの信仰があった。

竜馬は、うまれおちたときから、背中いちめんに旋毛がはえていた。父の八平は豪気な男だったからこれをおかしがり、

「この子はへんちくりんじゃ、馬でもないのにたてがみがはえちょる」

といって、竜馬と名づけた。

八平はよろこんだが、死んだ母の幸子はいやがり、
「猫かもしれませぬよ」
と心配した。幸子の記憶では、ちょうど懐妊したころ、可愛がっていた雄猫が寝床を恋しがってしきりと幸子の腹のうえにのぼってきていたことをおもいだしたのである。
「なるほど、馬か猫か、これはあやういところじゃ。馬なら千里の駿馬ということばがある。猫ならどういうことばがあるかな。そうじゃ、泥棒猫というのがある。竜馬は、どっちになるかい」
ところが長ずるにしたがって、意外に愚童だったために、竜馬の駿馬説は消えた。兄の権平も、
「やっぱり、猫じゃった。しかもあの愚鈍な様子では泥棒猫にさえなれそうにない」
しかし乙女は、そうはおもわなかった。寝小便ったれのはなたれ小僧で、手習いもろくにできない子だが、こどもにも骨柄というものがある。乙女の気のせいか、見ているとどことなく茫洋とした味があるようにおもわれるのである。兄の権平にそれをいうと、大食いの権平はちょうど午後三時のかゆを食っていたときだったが、めしつぶを噴きだして笑い、
「乙女の欲目じゃ。世間ではそういう者を茫洋といわず薄のろというちょる」
「でも、ほかのこどもとくらべると、どことなしに目の光がちがいますよ」
「あいつは、父上ゆずりで近眼なんじゃ。その証拠に、遠くをみるとき、シバシバと目を細めちょる」
「細めちょりますが、近眼ではありませぬ」
「近眼じゃ」

権平はそういうのだが、乙女には、竜馬が目を細めているとき、この少年だけがわかる未知の世界を遠望しているようにしかみえない。

乙女のほかに、もうひとりだけ竜馬の支持者がいた。ひょうきん者の源おんちゃんである。もっともこの老僕は乙女と竜馬のことなら、なんでも味方になるくせがあった。

「坊さんは、きっとえらくなる。いまははなたれじゃが、大きゅうなればきっと日本一の剣術使いになられまする」

源おんちゃんのりくつは単純で、竜馬の左の腕に一寸ほどのあざがあるからいいのだという。このあざの持主が剣をまなべば天下に風雲をおこす、という相学を、どこかできいてきたらしい。

「たれからきいたの」

「お釈迦さまよりえらいお人から、ききましてござります」

「へーえ。そんなひと、お城下にいるかしら」

「帯屋町に、いてござりまする」

「なんだ、阿弥陀仏のおんちゃんか」

例の道具屋の老人である。この老人はもともと須崎屋吉兵衛というのが正称なのだが、隠居して阿弥陀仏と号していた。

しかし、ばかにはできない。

ひょっとすると阿弥陀仏のおんちゃんの予言があたるかもしれないと乙女がおもいはじめたのは、竜馬が十四歳のときからであった。——この少年は近所の築屋敷に小栗流の道場をもつ日根

野弁治のもとに通いはじめてから、にわかに顔つきまでかわってきたのである。

小栗流日根野弁治の道場は、浦戸にそそぐ潮江川（いまの鏡川）のそばにある。川むこうに真如寺山がみえ、城下でも景色のいい一角である。

日根野弁治は城下でも随一の達人で、和術にも達していた。もっともこの小栗流というのは、刀術のほかに、和術と拳法を加味したもので、稽古もひどく荒っぽい。この先生は、稽古のときなど打ちこみが軽いと、「それではイタチも斬れん」と弟子を叱った。

「こうやるんじゃ」

竹刀を上段にとり、ずしっと腰を沈め、同時に、ぱんと相手の面を打つ。

「みたか。腰で斬る」

打たれる者はかなわなかった。面をつけているのに、衝撃が頭のシンまでくる。鼻の奥がきなくさくなり、目がくらんで倒れる者もいた。十四歳の竜馬も、ずいぶんやられたらしい。

入門後、ひとつきほどすると先生が竜馬の顔を、

「おンし、妙じゃぞ」

と気味わるそうにのぞきこんだ。理由は話さない。

竜馬は、毎日、剣術防具をかついで築屋敷から本町筋一丁目の屋敷にもどってくると、姉の乙女が待っている。

「庭へ出なさい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com